セッション「大学の活性化」

このセッションでは、個々の計画に対しての議論ではなく、これまでのセッションで見てきたサイエンスや諸計画を実行するため、(光赤外）天文学界全体をどのように活性化させるべきかを議論した。

まず問題提起として２名の方に講演をお願いした。吉井さん（東京大・天文センター）は「日本の天文学発展に対して大学はどのように取り組めば良いか」というタイトルで講演され、国立天文台で計画しているラボ制に大学からも参加できるようにという要望を出された。続いて佐藤さん（名古屋大・Ｚ研）は「固有値と多様性」というタイトルで講演され、固有種の試みという観点から問題提起された。[以上、集録原稿あり]

この後、大学天文台計画の紹介をはさんだ。京都大を中心とする岡山新天文台計画は、この光天連シンポジウムの直前に行なわれた光赤外ユーザーズ・ミーティングでよく議論されたので、割愛した。田中さん（東京大・天文センター）に「ＴＡＯ計画」を、市川さん（東北大）に「みちのく望遠鏡計画」の進捗状況を紹介して頂いた。[以上、集録原稿あり]

最後に「大学の活性化と共同利用研」という課題でパネル・ディスカッションを行なった。佐藤さん、田中さん、市川さん、高見さん（国立天文台)、面高さん（鹿児島大）の５名の方にパネラーになって頂いた。高見さんは、吉井さんが触れたラボ制について、国立天文台の議論を紹介された。市川さんは「巨大プロジェクトー大学から実験室が消える日」という観点を訴えられた。田中さんは大学天文台での新しい共同研究について、佐藤さんは「大を切り開く中小」を改めて訴えられた。面高さんは、地方大学で天文学の裾野を広げる方法について、色々と提案された。すべての人が、ものづくり、モノのあること、の重要性を説かれた。地方大学のスタッフ、また大学院生からも意見が出た。代表として、長尾さん（東北大）から集録原稿を頂いた。

結論を出すものではなかったが、ラボ制活用、大学天文台の推進、ものづくり、新しいサイエンスの掘り起こしと、それに後押しされた将来計画、という観点を参加者の中で共有できたのではないだろうか。

文責　富田晃彦（和歌山大・教育学部）